



總長室より

若き日に、同志社大學の教授として
 ことば「よき教師として、よき學者」
 として、學生の「よき友人」として生涯
 を終えるつもりでいたのに。事と志と
 異つて、何の因果か、unseen handを
 うらみつつ、古きいわれのある椅子に
 よりかかっている。よい同志社にしたい
 た。それのみか、いまのわたしのねがい
 ある。図書館の四階―昔の研究室
 と昔の大学―致遠館が樹々間に見
 える。雨の日も風の日も、毎日、毎日。

繪と文 住谷悦治



えと文 村上菜々子

太陽の匂い

太陽の季節が来た。枯れ枝だったあかしやも、小さな種の赤かぶもすべての物が動き出す。お日様にくすぐられて笑い出す。殻を割り土を払い我勝ちに生れ出る。

ひなげしやデージーの植わった私の庭にもくすぐったい笑い声が聞える。殻や土の動く音がする。花のほころぶ気色がある。新しい緑の匂いがする。雨の日は、その銀色の真珠の玉がビロード草の毛布の上を滑り落ちる。暖かい太陽の滴が滑り落ちる。月の光がマーガレットの白さをもっと白く染める時、新しい緑の匂いはいつそう新鮮で、いつそう青臭い。ヒヤシンスは、各々の花弁をかわいくカールさせた小さな花の束である。空を塗り終えた神様に、筆先の絵具をねだったような、空の色。金色のラッパ水仙は、太陽の小さな分身。スイトピーは、ビナスの口紅の跡。つやつや光る柿の葉っぱ。真赤な小さな紅葉の芽。丸い丸い桂の葉。大きく広がるぶどうのつる。

私は、こんな時太陽の匂いを感じる。

(昭三四女子高卒・画家)